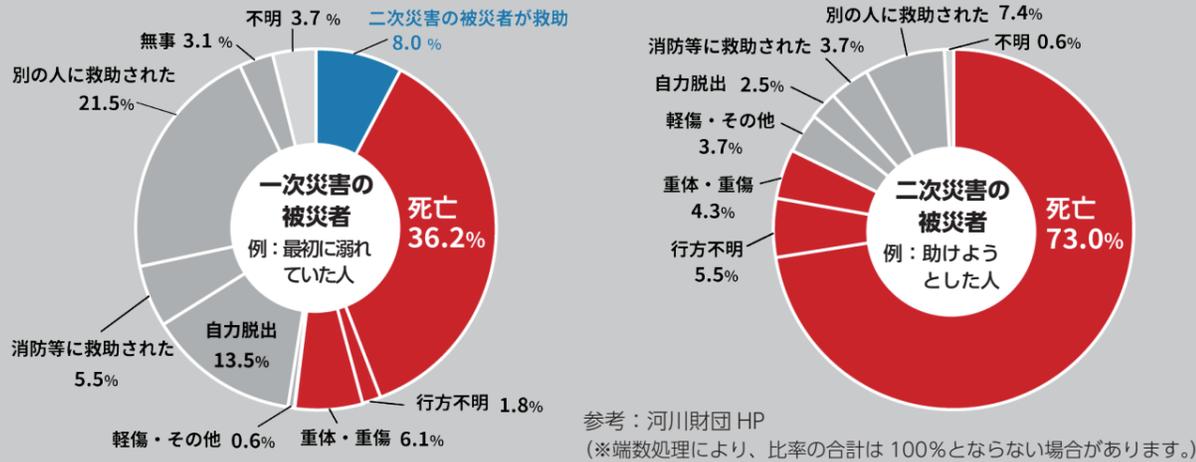


溺れている人を見つけても むやみに飛び込んではいけません

溺れている人はパニックに陥っているため、何かにしがみ付こうと必死です。慌てて助けようと飛び込んで行った人が、一緒に溺れてしまうといった二次災害が少なからず発生しています。



もし水難事故で二次災害が発生してしまったらどうなるのか



「助けたい」「何とかしたい」そんなときは？

浮き輪などの浮力体を確保し、ロープなどを付けて安全な場所から投げようとしてください。浮き輪以外では、遠くに投げやすいように少し水を入れたペットボトルや空気が漏れないようにふたを閉めたクーラーボックスも効果的です。



▲浮力体を投げ入れて水難者を救助する訓練の様子

水難事故で海や川での楽しい時間を台無しにしないように事前の備えや注意をしよう！



水難救助隊からのお願い

溺れている人を見つけたら すぐに通報してください

一刻も早く「119(消防)」に通報しましょう。「110(警察)」や海の場合は「118(海上保安庁)」でも大丈夫です。どこに通報しても、相互に連絡・連携して救助に駆け付けます。

電話がつながったら、落ち着いて状況を教えてください。まず伝えるべき情報は、「どこで溺れているか」ということ。これが、一番優先順位の高い情報です。その後、質問に順番に答えてください。

また、このとき重要なのは、溺れている人を見失わないこと。救助を呼ぶのに必死で、溺れている人の姿を見失ってしまうと、救助隊が来て、どこに助けに行けばいいのか分かりません。決して一人で何とかしようとせず、周りの人に声を掛けて協力を依頼し、「溺れている人を注視する人」「救助隊に通報する人」「浮き輪などの浮力体を投げる人」というように手分けをしてください。このとき、できれば「溺れている人を注視する人」は複数いたほうが安心です。



水難事故緊急連絡先一覧

消防 119
警察 110
海上保安庁 118



▲通報を受ける消防通信指令室の様子

落ち着いて状況を教えてください。

※どの番号に通報した場合でも、情報を共有し、すぐに駆け付けます。

訓練以外で飛び込むことがありませんように…



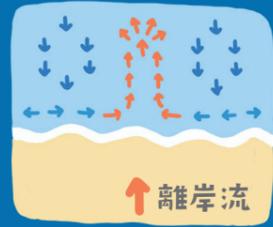
水難事故に遭わないために

⚠️ 危険な場所を確認し、近づかない

過去に水難事故が発生していたり、危険な場所には「遊泳禁止」「危険」等の表示がされています。水辺で遊ぶ際には周辺に表示などがなければ確認しましょう。

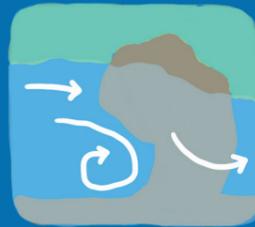
海の危険例 ⚠️ 「離岸流」

海岸に打ち寄せた波が沖に戻るときに発生する強い流れのことです。離岸流にハマると岸に向かって泳いでも、岸にはたどり着けません。その場合は岸と平行に泳ぎ、沖向きの流れがなくなったと感じたら、岸に向かって泳いでください。泳ぎに自信がない場合は、無理に泳ごうとせず、浮くことに専念してください。



川の危険例 ⚠️ 「アンダーカットロック」

水流等により下部がえぐれたようになった岩のことで、水面からは分かりにくく、水中では水面から川底へ循環する水流が発生しているため、一度引きずり込まれると水圧に押されて浮き上がれなくなり、危険が潜んでいます。



※川は海と異なり、少し場所が違えば大きく状況が変わります。一見流れが穏やかそうな川でも、実は流れが複雑であったり、急に水深が深くなったり、危険が潜んでいます。

⚠️ ライフジャケットを着用する

水に入るつもりがなくても、もしもに備えて水辺で遊ぶときはライフジャケットを着用しましょう。ライフジャケットは、体のサイズに合ったものを正しく着用しましょう。



⚠️ 子どもから目を離さない

子どもは予想外の動きをしたり、水深が浅い場所でも足を滑らせたり、流れや波にさらわれることがあります。海や川へ遊びに行くときには、必ず大人が付き添い、目を離さないようにしましょう。



⚠️ 体調がすぐれないときには泳がない

睡眠不足や疲れているとき、飲酒時など、健康状態が良くないときは泳がないようにしましょう。



⚠️ 悪天候のときは海や川には近づかない

台風などで波が高いとき、大雨のときやその直後は海や川も危険な状態です。むやみに近づかないようにしましょう。

